



TITLE:

<研究>朝鮮語における神の訳語ハ
ナニム

AUTHOR(S):

金, 香花

CITATION:

金, 香花. <研究>朝鮮語における神の訳語ハナニム. 基督教学研究 2016,
35: 175-190

ISSUE DATE:

2016-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/268660>

RIGHT:

朝鮮語における神の訳語

ハナニム

金 香花

はじめに

聖書が朝鮮語に翻訳され始めたのは一八八二年にロス(J. Ross)が中国で翻訳したルカによる福音書『예수성경 누가 복음전서』からだと言われている。それより少し遅れるが、一八八五年に李樹正が日本で翻訳したマルコによる福音書『신약 마가전 복음서 언회』が出版される。しかし、李樹正が使用した「シン」(神)は後の宣教師たちにより使用されず、ロス訳の「ハヌニム／ハナニム」が引き続き採用され、今日まで至っている。

なぜ神の訳語としてはハナニム¹⁾が採用されたのか。先行研究では、「最初の朝鮮語訳聖書が中国でなされ、中国語「上帝」の純朝鮮語訳がハナニムであるという事実関係に止まっている。しかし、このような偶然とも読み取れる歴史的事情だけでは疑問に残る部分が多い。最初の朝鮮語訳聖

書がスコットランド宣教師であるロスにより翻訳されたとしても、朝鮮におけるプロテスタント宣教は、アメリカ人宣教師たちが主要な役割を担っていたが、かれらが聖書翻訳における主導権を握ろうとしなかったはずがない。ロス訳聖書が広がり始めたにもかかわらず、李樹正の後、アンダウットを中心に聖書翻訳を進めていた。李樹正もアンダウットもハナニムを採用したわけではない。

当時の東アジアの文化的状況——漢文が共通の書き言葉として使用されたこと——と、宣教師たちの東アジアに対する認識——最初から中国、日本と朝鮮をはっきり意識したわけではない——から考えると、朝鮮語における神の訳語と訳語論争を、東アジア全体の中で考える必要がある。このような文化的状況は、聖書翻訳方法に直接反映され、宣教師に関しては、訳語理解のつながりから確認することができる。

本論文では、歴史的な事実関係に基づき、一つは、翻訳と宣教師の訳語理解を、翻訳上の基本的な争点である「原文を重視するか訳文を重視するか」という視点から分析すること、もう一つは、中国における訳語論争とのつながりで考えることを試みる。

以下において、ハナニムを朝鮮語における訳語論争で考

えると同時に、各宣教師の翻訳原則に焦点を合わせて、翻訳原則と神の訳語間の対応関係を描いてみる。また中国語における訳語論争とのつながりを訳語理解と翻訳原則という文脈で考えることにする。

一 朝鮮語の訳語論争から見るハナニムの意味変容

朝鮮語における神の訳語論争は、アンダウツトが李樹正により使用された「シン(神)」に異議を唱えたことから始まったと言われている。アンダウツトは、李樹正訳マルコによる福音書をもとに、アペンゼラー (Henry Gerhard Appenzeller) と新しい朝鮮語訳マルコ福音書を一八八七年に翻訳出版した。アメリカ聖書協会の支持を得るためには、李樹正訳(一八八五年)と競争する立場になっていた。彼は、李樹正訳に対して、神の訳語として「シン」を使用したことに批判した。「シン」が当時の朝鮮語では鬼(Demon)として理解されるため、「神の子イエス・キリストの福音」が「鬼の子イエス・キリストの福音」に誤解される恐れがあるからであった。

しかし、だからと言って、アンダウツトが李樹正訳より

少し早く出版されたロス訳(一八八二年)で使用されたハナニムを支持したわけでもない。アンダウツトは、訳語論争を引き起こしただけではなく、一九〇三年までハナニムに反対し、訳語論争を続けさせた。

ここでは、玉聖得が整理した訳語論争を、ハナニム理解への変容という視点から見ることにする。朝鮮語における神の訳語論争に対する先行研究として白樂濬、全澤堯の研究などが挙げられるが、その歴史の全体像を最も包括的に描いているものとしては、玉の研究を挙げることができる。玉の後、金成恩の研究もあるが、訳語論争というテーマに関しては、玉を超えることができなかつたと言わざるを得ない。

したがって、本論文で扱う訳語論争の歴史の流れは、玉に従うことにする。

一 一 ハナニムの「上帝」としての理解

最初の朝鮮語訳聖書と言われているのは、ジョン・ロスが一八八二年に中国で翻訳したルカによる福音書である。ロスは一八八一年の教理書「イエス聖教問答(예수성교문답)」と「イエス聖教要領(예수성교요령)」から、神の訳語としてハナニムを使用し始めた。ロス自身は訳語

論争に直接参加したことがないが、彼が採用したハナニムは訳語論争の全過程で強力な候補として存在し、最後には安定的に使用されるようになった。それだけでなく、訳語論争全体が、ハナニムを支持するか反対するかによって進められたと言える。そのために、ロスの手ハナニム理解から取り扱うことにする。

ロスが理解した「ハヌニム／ハナニム (hananim/hananim)」は「至高神 (the Supreme Being)」であり、中国語の「上帝」に相当する概念であって、「天」から出てきた概念であった。

「朝鮮人は、至高神に該当する純粋な朝鮮語の名前と漢文から借りてきた名前を持っているが、前者は hanul (天) から出てきた Hanonim であり、後者は Shangde (上帝) である」。

「朝鮮人は天の主 (Lord of Heaven) を意味するこの語 (Hananim) を漢字では「上帝 (Shangti)」に翻訳する」。

ハナニムという訳語は、ロス訳聖書が朝鮮の北部と西部に、続いては南のほうに広まっていくにつれて、朝鮮全土に広まって行った。ロス訳聖書に関しては、その価値に対してさまざまな意見があったものの、一八八七年に最初の

朝鮮語訳新約全書であるロス訳『イエス聖教全書 (예수성교전서)』は、一九一一年に新しい聖書が出るまで大きな影響を与えた。

一―二 ハナニムの「天主」としての理解

一八九四年には訳語論争が激しくなっていた。玉は、このように用語問題が論争対象になり、訳語論争が本格化したのは、一八九三年にアンダウツトが讚美歌を発行し、「真神」「エホバ」を使用してからだと言った。

当時、イギリス聖公会のコーフ主教と聖公会の宣教師たちはテヨンジュ (예전天主) のみを強く主張し、ほかの訳語には目も向けなかった。シン (神)、シャンデ (上帝の音訳)、テヨンジュ (天主)、ハナニムという訳語候補から、常任委員会の翻訳者会が投票で決めることにした。四対一 (テヨンジュ対ハナニム) でテヨンジュが選ばれた。しかし、常任委員会に属していない多大数の宣教師たちがハナニムを要求した。その結果、テヨンジュ版とハナニム版を同時に印刷することになった。

二つの訳語が共存することをなぜ宣教師たちは許したのか。それは、綴字としては異なる二つの朝鮮語の用語であるが、その意味レベルにおいては同じ漢字用語である「天

「主」に合意したからである。

「しかし、現在では、『天主』とその朝鮮語訳である『ハナニム』を使用することを決定したことにより、用語問題は解決されました」。

「天主」の等価語でありながらロス訳本で認められた『ハナニム』を公認することを拒否することは残念なことです」。

このようなハナニム理解については、訳語論争を避けるためだと解釈するのが妥当であろう。当時の宣教師たちは、中国で長い年月を経ても解決の見込みがない訳語論争を見てきた。彼らにとって、このような訳語論争は、宣教の大事な時間を無駄遣いにしてしまう恐れがあつたため、宣教師間の一致が当時では第一に重要視された。

以上の事情から、テヨンジュ版とハナニム版は一八九五年から十年間共存するようになったが、その後では「テヨンジュかハナニムか」という論争が続いていた。この対立においてハナニムに反対し、テヨンジュを支持したのはアングウツト、ギフォードとスクラントンであつた。

その中で、この訳語論争を引き起こした張本人であるアングウツトは、神の訳語を選ぶときに、ある文化圏（受容言語）の既存神名を使用するのではなく、包括的な用語を使

用すべきであるが、しかし、包括的な用語の使用が不可能な時は「エホバ」を使用すべきだと言う。

ハナニムにもシンにも反対したのは、アングウツトにとって、当然なことであつただろう。彼が使用したチャムシン（真神）、シャンデ（上帝の音読み）、テヨンジュ（天主）、シャンジュ（上主）は、受容言語の特定の神名であるハナニムを避け、また包括的な用語であるシンの欠点を補完しようとした試みである。しかし、これらの訳語は採用されなかつた。

一―三 ハナニムの「一つの主」としての理解

一九〇三年の初めまで、一人でテヨンジュ「天主」を主張し続けたアングウツトは、最後にハナニムを受け入れるようになったが、その理由として、朝鮮語固有のハナニムが「唯一者」という意味があつたことに気づいたことを玉は挙げてゐる。

ハナニムを「一人の大きい方」として理解する試みは、ゲイルにより一九〇〇年からすでになされてきた。

「朝鮮人がいうGodは、一―大―方(The One Great One)」である。『ハナニム』である。漢文においても朝鮮語においても、この名前は「一」と「大」から成つ

ている用語である」。

「ハナニムは『一一大一方』であり、至高者であり絶
対者として神秘的なヘブライ語の『私は私である』を連
想させる」。

アングウットが中心に立っていた訳語論争は、ハナニム
の唯一神理解により終止符を打つことになった。

唯一神としてのハナニム理解は一九一一年から聖書で使
用されるようになり、それから神学的作業がなされ、一九
三九年には定着するようになる。

朝鮮語における神の訳語ハナニムは、ロスにより採用さ
れ始め、その意味が「上帝」⇨至高者(Supreme One)、「天
主」⇨天の支配者(Havenly Lord Ruler)と「一人の主」
⇨唯一者(The One Great One)としてそれぞれ理解され
てきた。

玉は、「上帝」と「天主」は同じく「天天主」を意味し、
語源的に見ると、実質の変化はないと言う。それだけでは
なく、中国語で考えるなら、至高者、天の支配者と唯一者
は「上帝」に同時に含まれている意味である。当時の朝鮮
語は、意味レベルにおいては漢文に大きく依拠していたた
め、「上帝」の朝鮮語表現であったハナニムという語に、こ
れら三つの意味が内在していることは十分に理解できるだ

ろう。

二 訳語主張と訳語原則

訳語への異なる主張については、その依拠するところと
して、原文の理解と受容言語への理解が重要であるが、そ
れぞれの翻訳者が持っている訳語原則が決定的に重要だと
言える。最終的に朝鮮語における神の訳語として定着され
たハナニムを、訳語論争の中で、その意味変化を見た。こ
の訳語論争は大きく、ハナニムを支持した宣教師と、ハナ
ニムに反対した宣教師に分けることができる。それぞれの
主張を持つ宣教師の中で、ハナニムの意味変化の各時期の
代表的な宣教師を一人ずつ選んで、その訳語原則を考察す
ることにする。

注目すべきは、ハナニム支持者としてはロスとゲイル、
そして反対者としてはアングウット(一八九三年以前のア
ングウット)である。

二一 一 ロスの翻訳原則

中国に宣教師として派遣されたロスが、中国で朝鮮人と
協力して聖書を朝鮮語に翻訳することができたのは、漢文

という書き言葉が当時の中国と朝鮮で共通して使用されたからである。ロスの翻訳方法から見てみる。

「朝鮮人学者は漢文古典文体の翻訳能力に優れています。このような学者に、私は漢文古典の福音書と口語体訳本を提供します。彼は朝鮮語に翻訳された原稿を私に提出します。そうすると、私が雇ったキリスト教真理に精通している朝鮮人学者（翻訳した人と違う人）と私は、その原稿を Revised Greek and English New Testament と一語一句比較しながら検討します。……最後は、修正された原稿を Greek Concordance 辞書で、一つのギリシア語ができる限り近い意味の朝鮮語に一貫して翻訳されているかどうかを確認します」。

このような翻訳方法の中で、ロスの翻訳原則は、原稿を検討する中に体现されている。ロスは翻訳原則に対して、「一つは、原文の意味と朝鮮語の慣用表現 (Idiom) にできる限り一致させる絶対的な逐語訳である」と言う。ロスはライトに送った手紙の中で「絶対的な逐語訳」を翻訳原則にしていると云っているが、しかし、その次に続く説明からすると、原文の一語一句をそのまま原文の形式通りに翻訳する「逐語訳」ではないことがわかる。

「たとえば、『履物のひもを解く』のような箇所は、履物を脱ぐ前に解かないといけないひもがない人たちにとっては意味がない」。

ゆえに、ロスの翻訳原則は、直訳しても朝鮮語でその意味が分かれば直訳し、もし意味不明な朝鮮語になる場合は、朝鮮語の慣用表現を優先したと言えよう。すなわち、読者の理解が最優先されたことである。この点に関して、ロスが現地語を重要視していることは、次のような発言からもわかる。

「しかし、朝鮮人学者たちが現地語で翻訳された書物の単純性を嘲笑しようとも、朝鮮のあらゆる女性たちが読めるような言語こそ聖書の言語です」。

現地語を重視しているロスにとって、純朝鮮語表現であるハナニムを使用したのは自然なことである。

二二二 アンダウットの翻訳原則

アンダウットがどのような翻訳原則を主張したのかに関しては、彼が会長を務めた、一八九三年に成立した翻訳者委員会 (Board of Official Translators) の翻訳原則から確認することができる。翻訳者委員会が採用した聖書翻訳方法は中国委員会の方法であった。すなわち、一八九〇年

上海宣教会で決定し、一九二二年に出版された和合本の方法である。

「一、言語表現に関しては、欽定訳のように、文字が読めるあらゆる人たちが容易に理解できる日常口語体であること。

二、文体は理解しやすいものであると同時に、風雅であること。

三、翻訳は原文に近い直訳であること。

四、たとえ話ができる限り翻訳し、言い換え (Paraphrase) をしないこと」。

この翻訳原則は、分かりやすさに関しても触れているが、三と四項で明らかかなように、「原文に近い直訳」が第一に重視されたと言える。ここで言う翻訳は直訳であり、この直訳は、原文言語の表現形式をそのまま訳文に置き換えるものであり、受容言語の表現形式に転換することは二次的扱いになると理解するのが妥当であろう。すなわち、受容言語の読者の理解より原文の正確性が第一であったと言える。

このような翻訳原則は、一九一一年に翻訳者委員会が改訳者委員会 (Board of Reviser) に変わった時にミュラー総務からもらった翻訳指針書の内容とも一致している。

「六、日常に使用される言葉に翻訳し、簡潔でよく知られている用語を採択するが、卑俗な表現は避ける。

翻訳はできる限り言い換えはしない。翻訳はその受容言語が許す限り逐語的であること」。

ここで言う逐語的翻訳は、ロスが言う逐語的翻訳とはかなり異なるものである。表現上では、「原文の意味を正確に伝えること」と「わかりやすい表現を使用すること」が同じく原則として挙げられているが、重きをどこに置いたかに関してはロスとアンダウットは正反対の選択をしたと言えよう。

のちに、ゲイルはこのような翻訳原則に反論したが、会長を務めたアンダウットが、このような一貫した翻訳原則に抵抗を見せた記録はない。このような翻訳原則は、彼が訳語を選択するときの原則と一致するものである。

二―三 ゲイルの翻訳原則

アンダウットがロス訳聖書の無用論を唱え、新しい聖書翻訳を始めようとした時から、ゲイルはロス訳聖書の価値を認めていた。

ゲイルは、アンダウットが会長であった聖書委員会の一人 (五人中の一人) であり、アンダウットとともに聖書翻

訳作業を行っていた。彼の翻訳原則はアンダウットと大きく異なっていた。しかし、彼の翻訳に対する明確な主張はアンダウットが死亡し、ゲイルが改訳者委員会の指導者になったのちに公言されている。

「私は聖書の言葉の価値を認識し、また「聖書が」ほかの書物と異なっていることも知っています。それから、お祈りの精神をもつて接すべき書物であると思っています。そのため、原文のあらゆる文と句と語を朝鮮語が許す限りにおいて翻訳しようとしています」。

「毎日反復される日課を通して確信したのは、この作業（翻訳作業）において、慣用的で文法的な朝鮮語が最優先的に必要だということです。どれだけ逐語的であり、どれだけ学問的であろうと、朝鮮人が読もうとしなく、捨ててしまうような聖書は何の意味があるでしょう」。

ゲイルによると、聖書の言葉がほかの書物と異なる重大な価値があるからこそ受容言語である朝鮮語で読んでその意味が分かるように翻訳すべきである。彼は、当時所属していた聖書委員会の翻訳原則が、原文の意味を正確に伝えると同時に朝鮮語で読んで意味が通るように翻訳することであることを常に意識していた。しかし、「実際に翻訳をし

たことがない人にとって、この原則はとても簡単に見えます。……紙上では輝かしく見えるが、実際に行動をとろうとしたら、無意味になります」というように、実際の翻訳実践では朝鮮語を重視する方をとる必要があるとする。なぜなら、読者が読もうとしない、あるいは読んでその意味が理解不可能であれば、翻訳を通しての伝達がそもそも始まらないからである。

これは、中国の訳語論争において「上帝」を主張した宣教師たちと共通する。

ロス、アンダウットとゲイルの翻訳原則を見ると、ロスとゲイルには受容言語を重視し、読者の理解を優先する共通点が見える。これはまた言い換えれば、朝鮮語における神の訳語ハナムの採用には、翻訳原則における受容言語を重要視する主張が大きく作用したと言えるのではない。当然、ロスとゲイルがまったく同じではない。ロスよりゲイルの方がより自由な訳をとっている。ロスは直訳しても朝鮮語でその意味が通るなら直訳し、直訳したら意味が不明になる場合のみ意訳するか省略あるいは説明を加える。それに対してゲイルは、言い換え(Paraphrase)の方法をとっている。それと反対に、アンダウットは原文の意味の正確性を重要視する。

三 朝鮮語訳語論争と中国語訳語論争のつながり

朝鮮語における訳語論争は、中国語における訳語論争とは異なる歴史状況の中で起き、展開された事柄である。それゆえ、この二つのテーマがそれぞれ別個に扱われるのは当然である。しかし、それと同時に、ロスの聖書翻訳方法にも直接に反映されたように、当時の中国と朝鮮において、漢文が書き言葉として共通に使用されていたことは、訳語の選択という問題に関してはきわめて重大な意味をもった。また宣教師たちのつながりから見ても、中国語と朝鮮語における訳語論争には共通に論じられる部分が大きい。それゆえにここでは、それぞれの訳語を主張した宣教師の翻訳原則と、「上帝」を主張した宣教師の「上帝」理解を考察することにより、朝鮮語における訳語論争と中国語における訳語論争を同一論争の部分的存在として論じることを試みる。

三一 中国語における訳語論争

中国における訳語論争は、大きく一八四〇年代、一八七〇年代と一八九〇年代に分けることができる。どの時代に

も、それぞれの特徴はあるものの、原文の正確性と訳文の理解とがそれぞれの強調する立場だったことと、上帝を主張する宣教師たちは、読者の理解を重要視したことは、共通に確認できるものである。

どの時代を取り上げても差し支えないが、四一二で一八四〇年代の内容に触れるので、それとの重複を避けるために、ここでは一八七〇年代を取り上げることにする。また、時間的にも、朝鮮語における訳語論争の直前になることを考慮した。

一八四〇年代の論争から三十年ぐらい静まっていた論争は、プロジェクト (H. Blodgett) が一八七五年一二月の「宣教師ニュース」(Missionary News)で公開書簡を書き、訳語論争は宣教師大会で避けようと呼びかけたことが、訳語論争をもう一度思い出させることになった。一八七五年から一八七七年の間に「教務杂志」(The Chinese Recorder and Missionary Journal)に掲載された訳語論争に関する文章を読むと、この時期の議論は、一八四〇年代の論争の争点を引き継ぎながら、論争の整理と分析が行われたことがわかる。一八四〇年代の論争が、言葉の辞書的な意味と古典で使用された意味に集中されたのに対して、一八七〇年代の議論では、「宣教経験」と「理論的考察」の視点から

議論したのがその特徴だと言えよう。

それぞれの観点を主張する例を挙げてみよう。

「上帝」を主張するダグラスは、まずあらゆる崇拜対象と唯一なる真実の神を同時に指し示す言葉が、中国語にないことを指摘する。中国語にはこの二つの概念をそれぞれの言葉で表現している。それが「神」と「上帝」である。次に彼は、キリスト教的書物と説教の中でより重要なのが「God」に関して語るときその言葉自体の使用でふさわしい方⁽⁴⁾だと言う。このように考えると、「上帝」がよりふさわしいとの結論になる。

ダグラスはこのような「上帝」の意味を、中国古典の意味から論拠を提供するだけでなく、福建省での宣教実践の経験も挙げている。また署名つきの文章において、次のように言う。

「私はその偉大な名前に対し『神』を最善の用語として受け入れることができない。異教の聴衆に説教をするとき、『上帝』を使うときのように私が言っていることを理解させることができない⁽⁵⁾」。

「上帝」を主張する宣教師たちの文章には、中国人キリスト者たちの理解を重要視した特徴が見える。彼らの文章の中には、「経験」「実践」という言葉が頻繁に出てくるが、

それはほかでもなく、彼らが聖書の真理を述べ伝えるときに、その話を聞いた中国人たちが理解できるということである。その反面、「神」を強調する宣教師たちの文章には、論理的に証明できることが重要視されたものが多く登場する。

例えば、『儒教とキリスト教の関係 (Confucianism in Relation to Christianity)』という書物を批判する文章の中で、「上帝」を批判する主張を述べているときに「しかし、その文章の中でこれに関する主張を検討するとき……論理的な帰結の重みを背負わないといけない」という表現が見られる。またプレストン (Rev. C. H. Preston) の文章には「神性の教義は論証できない固有名詞に頼るのではない、これは推論と論理的結論に教わるものである⁽⁶⁾」との表現がある。

プレストンはエロヒムとテオスがそうであったように、中国語でも総称的な名称を使用すべきことを主張する。彼によると総称的な名称は「それ自体の中にあらゆるものを含んでいる」。また「総称的な名称は最高者であり得る⁽⁷⁾」。なぜなら「総称的な名称が含んでいる範囲が広ければ広いほど、含んでいるものが多い」からである。その反面、「形容詞はこのような用語 (総称的な名称) の意味に何も足す

ことができない、ただ限定するだけである」と言う。彼の観点からすると、「神」が総称的な名称であり、「上帝」がある特定の意味しか表現できない限定された用語なのである。従って、「神」がよりふさわしいことになる。

この時代の論争の特徴からわかるように、「上帝」を主張する宣教師たちは宣教現場での経験を重要視した。宣教現場においては、伝えようとする意味がなんであろうと、まず聞き手が理解できないと宣教活動がそもそも続けられなかっただろう。その反面、「神」を主張する宣教師たちは論理的思考方法を重要視したのである。

三一 二 ハナニムと上帝の直接なつながり

ロスが理解したハナニムが中国語での「上帝」であることはすでに確認したが、では、そのハナニム＝上帝が、中国語の訳語論争の中の「上帝」とどのような関係であったのか。

ここでは、玉聖得が二〇一二年に書いた論文「ゴッドの中国語名の争い―中国語における訳語論争と韓国に対するその影響」(Competing Chinese Names for God: The Chinese Term Question and Its Influence upon Korea)に基づいて、ロスが「上帝」の朝鮮語表現として理解した

ハナニムと中国語における神の訳語論争の中の「上帝」の関係を確認することにする。

この論文において、玉は、「上帝」を主張した主要な人物として、メドハースト、レッグとロスを取り上げ、またメドハーストからレッグに、レッグからロスに引き継がれたラインを描いている。

メドハーストが「上帝」を主張したのもっとも主要な論点としては、儒教古典において「上帝が最高の支配者である」点が挙げられる。「神」は自然現象の延長であり、より高次の力の支配と指導を受ける概念であるのに対し、「上帝」は儒教と道教の古典、さらに康熙字典の中で「天地海の最高支配者」とされる。古代の中国人たちは天の支配的パワー、あるいは天の支配者と地上の君王を結びつけた。

最初はキリスト教の神の訳語として「神」を使用したレッグは、メドハーストによる儒教古典学問を受け入れ、一八四八年から「神」の代わりに「上帝」を使用し始めた。レッグはメドハーストと同じように、「上帝」が「最高の支配者」という点を強調するが、それより一歩踏み出し、「純粹な一神教とは言えないが、確かに一神教である」と主張する。そのほか、レッグの最も大きな特徴としては、彼が、キリスト教の神の原語 (elohim, theos) が総称的な用語 (generic

term)であるという考え方に異議を唱え、相対的用語 (relative term) として原語を理解した点にある。彼によると、Godと上帝は同じくそれ自身で至高神を表すだけでなく、ほかのあらゆる存在との関係をも表している。換言すれば、上帝は自立的存在者 (self-existent) であるだけでなく、天地を創造し、世界を支配し、人間によい本質を賦与し、古代中国人に自分を明らかにし、中国人たちの祈りを聞き、中国人に礼拝された人格的神 (personal God) である。

メドハーストと同様、レッグも「中国人が真神の存在を知っていた」ことを主張する。鈴木広光が指摘しているように、「上帝」を主張する宣教師たちが「神」派の考えと決定的に異なるのは、「キリスト教徒が中国思想を如何に理解し、その研究成果を聖書翻訳に反映したのか」によるところが大きい。

中国語でのキリスト教の神の訳語と朝鮮語での神の訳語を関連付けたロスがハナニムの語源的意味が天であり、ハナニムが天の支配者を指すと理解したことは二一で確認した。

安成浩によると、ロスが上帝を採用したのはウィリアムソンとレッグの影響を受けたからである。「上帝」を「至高神」に理解し、一神教的に理解したのはレッグとロスの共

通点であるが、玉はレッグとロスの間のアプローチの仕方に相違を見る。すなわち、レッグが儒教古典と古い王室記録に依拠しているのに対し、ロスは、それだけでなく、当時の中国人たち（満州にいた商人と農民たち）が上帝をどのように理解したかを実際に調べ、上帝信仰の一神教的跡を探そうとした。同じような手続きが朝鮮語における神の訳語探しにも採用された（中国国内にいた朝鮮人に限定される）。

レッグとロスの間には、玉が指摘しているような相違は確かに見えるが、新約全書を出版（一八八七年）した後、ロスが「朝鮮語におけるハナニムは中国古典テクストの上帝と同等である」と再び主張したように、中国の儒教古典を根拠にしたことには変わりがない。

メドハーストとレッグとロスは、「上帝」を主張する上で、それぞれ異なる特徴を持っているが、基本的な考え方に共通理解があることを確認することは難しくない。すなわち、両者が「上帝」を中国の儒教古典の中で理解し、そのような理解が「至高神」である点でキリスト教の神の訳語としてふさわしいと判断したのである。また、儒教古典の中で理解された「至高神」がキリスト教の神の「至高神」という同じ特徴を有するためには、キリスト教の神が古代の中

国人たちに自らを啓示し、中国人たちはその神を知つていたということになる。

ここで、本章の議論を確認しておきたい。朝鮮語における神の訳語論争でハナニムを主張した宣教師たちと、中国語における訳語論争で上帝を主張した宣教師たちの翻訳原則には、受容言語における読者の理解を第一に重要視したという共通点を見出すことができる。それから、レッグとメドハーストの上帝理解から、ハナニム上帝だと主張したロスの理解した上帝と、中国語の訳語論争における上帝との間に基本的な共通理解があることが確認できる。

終わりに

本論文では、朝鮮語における神の訳語ハナニムが作用されてから定着するまでの意味変化を訳語論争から見てきた。この訳語論争は、さまざまな訳語が候補に挙がったものの、ハナニムを支持する翻訳者と、ハナニムに反対する翻訳者に分けることができる。

また、このような分け方は、各宣教師たちの翻訳原則の分析からも確認できる。それぞれの訳語主張には異なる翻訳原則が働いているが、ハナニムを主張する宣教師たちの

翻訳原則には、受容言語での読者の理解を重要視したという共通点が存在しており、キリスト教の神がなぜ朝鮮語ではハナニムなのかについて、翻訳原則という角度からも一定の説明を与えることができる。

また、このような翻訳原則の特徴は、中国における訳語論争の中で「上帝」を主張した宣教師たちの翻訳原則の特徴と一致するものであった。それゆえに、神の訳語を受容言語における読者の理解を優先するか、それとも原文の意味の正確性を優先するか、という翻訳の視点から見ると、朝鮮語における訳語論争と中国における訳語論争を同一論争の二つの展開として理解することが可能になる。

註

- (1) ハナニム表記に関しては、ハヌニム(하느님)、ハナニム(하나님)とその両方の発音が可能であった古語表記があるが、玉聖得によると、これらの表記は意味上の相違がない。ゆえに、本稿では、便宜上ハナニムに統一する。
- (2) 玉聖得、「初期朝鮮語聖書翻訳に現れた主要論争研究(一) 八七七—一九三九」一九九三年、二八—二九頁。
- (3) 一八八三年、日本にいた李樹正は、ロスが翻訳した聖書を読んで、それが無価値だと判断し、聖書の漢韓新約聖書

を訳し始めた(『大韓聖書公会史資料集I』三〇六頁)。彼は、ルミスの支持のもとで、ブリッジマン・カールバトソン訳新約全書をもとに翻訳をした。

- (4) 『大韓聖書公会史資料集I』三七六頁。
 (5) 玉聖得, 前掲論文, 二二—四二頁。
 (6) 류대영・유성득・이만열 공저 『대한성서공회사 II - 번역·반포와 권서사업』대한성서공회, 一〇五—一〇六頁。
 (7) J. Ross, *History of Korea, Ancient and Modern* (London, Elliot Stock), 1891, p. 355.
 (8) J. Ross, *The Gods of Korea* GAL, Aug., 1888, p. 370.
 (9) 류대영・유성득・이만열 공저 『대한성서공회사 I - 조직·성장과 수단』대한성서공회
 (10) 『大韓聖書公会史資料集I』二五八頁。
 (11) 玉聖得, 前掲論文, 二九—三〇頁。
 (12) 『大韓聖書公会史資料集I』二五八頁。
 (13) 前掲書, 二六二頁。
 (14) 前掲書, 二六二頁, 二六六頁。
 (15) 前掲書, 二六二頁。
 (16) 前掲書, 二六八頁, 二七四頁。
 (17) 前掲書, 二七〇頁。
 (18) 同上。
 (19) 前掲書, 二六六頁, 二七二頁。
- (20) 前掲書, 二五八頁, 二六二頁, 二六六頁。
 (21) L. H. Underwood, *Fifteen Years Among the Top-Knot or life in Korea*, P103-105.
 (22) 玉聖得, 前掲論文, 三八頁。
 (23) 前掲論文, 四〇頁。
 (24) 前掲論文, 四一頁。
 (25) 前掲論文, 三五頁。
 (26) 『大韓聖書公会史資料集I』六四頁。
 (27) 前掲書, 六二頁。
 (28) 同上。
 (29) 前掲書, 八四頁。
 (30) 류대영・유성득・이만열 공저 『대한성서공회사 II - 번역·반포와 권서사업』대한성서공회, 三六頁。
 (31) 同上。
 (32) 前掲書, 一二二頁。
 (33) E. Bryant's letter to W. Wright, July 3, 1890. 『大韓聖書協會史資料集I』一六四頁。
 (34) アンダウットが亡くなったのは一九一六年であり、ゲイルの翻訳指針が表面に浮かび上がったのは一九二〇年からであると玉は指摘する(『大韓聖書協會史II』一三〇—一三一頁)。
 (35) ゲイルから R. Kingour に送った手紙。一九二二年十月十

- 曰(『大韓聖書藝文史』一三三頁)。
- (36) Report of J. S. Gale for Year 1921-1922. (『大韓聖書藝文史』一四一頁)。
- (37) 前掲書、三三五。
- (38) 五福海、前掲論文、四五頁。
- (39) 程小娟『God的汉译史：争论、接受与启示』社会科学文献出版社、二〇一三年。
- (40) Carstairs Douglas, "Spirit" and "God": How should they be translated?, *The Chinese recorder and mission-ary journal* 1876, January-February. Shanghai: American Presbyterian Mission Press, p. 71.
- (41) *Ibid.*, p. 72.
- (42) *Ibid.*, p. 72.
- (43) *Ibid.*, p. 69.
- (44) Enquirer, 'On the Terms for "God" and "Spirit"', *The Chinese Recorder and Missionary Journal* 1876, July-August. Shanghai: American Presbyterian Mission Press, p. 295.
- (45) *The Chinese Recorder and Missionary Journal* 1877, July-August. Shanghai: American Presbyterian Mission Press, p. 353.
- (46) Rev. C. F. Preston, 'Terms in Chinese for "God",

"gods" and "Spirit"?' *The Chinese recorder and mission-ary journal* 1877, May-June. Shanghai: American Presbyterian Mission Press, p. 229.

- (47) *Ibid.*, p. 238238.
- (48) *Ibid.*, p. 229.
- (49) *Ibid.*, p. 229.
- (50) *Ibid.*, p. 229.
- (51) 鈴木広光が「メトヘーヌトは『神』の意味分析において、*是*字の『鬼神』論を彼なりに理解し、この語から神性を奪い取ったが、万物の根源・根拠に関する上位概念にうつては古代儒教の人格的な『上帝』を配した」と言う。鈴木広光『神の翻訳史』『國語國文』七四巻、二〇〇五年、七一―八頁。
- (52) Medhurst, Walter Henry, *A Dissertation on the Theology of Chinese with a View to the Elucidation of the Most Appropriate Term for Expressing the Deity, in the Chinese Language*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1847, p. 186-191, 246-249, 257-260.
- (53) 総称的用語 (generic term) として神の言語を理解する、ニャーローの主張を補うものとして、以下のものが挙げられる。him は形態的には複数形だが、異教の神々に適用される場合を除けば、構文的には動詞や形容詞の単数と一致する。

- このように実際に複数を示すためだけでなく、たとえ単一の存在であっても、その偉大さや威厳を強調するために複數形の形態をとる用法は、ヘブライ語の特徴のひとつである。イスラエルの民は自らが崇拜する神を *elohim* と呼ぶ。多くの場合、これに限定する詞を加えて「イスラエルの神」「ヤコブの神」「真実の神」などと呼んだ。また旧約聖書では、偶像崇拜の対象である異教の神々にもこの語が適用されている。この *elohim* が真神が偽神か、また単數か複數化を特定せずに用いられていることを理由に、この言葉を「神の総称 (generic term)」であると定義した」(Lowrie, *Remarks on the words and phrases best suited to express the name of God in Chinese*. vol. 15, No. 12, p. 577) (鈴木広光「神の翻訳史」)。
- (54) レッグはまず *'elohim* theos が総称であるという解釈の前提を否定した。「総称は何らかの限定詞がなければ、單數形で個々の存在を表すことはできないが、これらの語は *seu hui hui*」(Legge, *Letters on the rendering of the name God in the Chinese language* III. Hongkong, 1850, p. 14)。*レミン* は *リネー* の著書『自然哲學の數學的原理』を典拠にし、原語は「相対的用語 (relative term)」であると主張した。「つまり、*elohim* や *theos* の意味は支配者・主宰者であり、しかもそれが支配する靈や造物との關係を表している」(Legge, *An argument for shang te, as the proper rendering of the words elohim and theos, in the Chinese language*. Hongkong, 1850, p. 7) とする。鈴木広光「神の翻訳史」『國語國文』七四卷、二〇〇五年、七一―八頁。
- (55) Legge, James. *An Argument for Shang te as the proper rendering of the Words Elohim and Theos in the Chinese Language with Strictures on the Essay of Bishop Boone in Favour of the Term Shin*. Hongkong: Hongkong Resister Office, 1850, p. 75.
- (56) Legge, James. *The Notions of the Chinese Concerning God and Spirits*. Hongkong: Hongkong Resister Office, 1852, 2, p. 86.
- (57) 安成浩「十九世紀前半中国語代表者訳における訳語論争が初期朝鮮語聖書翻訳に及ぼした影響」(一八四三―一九一一)『韓国キリスト教と歴史』九(二)、二二二―二五〇頁。
- (58) 玉聖得「前掲論文」二六頁。